

(19) 日本国特許庁 (JP)

## (12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平 6-259927

(43) 公開日 平成6年(1994)9月16日

(51) Int. Cl.<sup>5</sup>G 1 1 B 23/28  
23/00

識別記号

庁内整理番号

F I

技術表示箇所

D 7201-5 D  
X 7201-5 D

審査請求 未請求 請求項の数 6

F D

(全 2 4 頁)

(21) 出願番号 特願平5-76329

(22) 出願日 平成5年(1993)3月9日

(71) 出願人 000002185

ソニー株式会社

東京都品川区北品川6丁目7番35号

(72) 発明者 岸 義雄

東京都品川区北品川6丁目7番35号

ソニー株式会社内

(72) 発明者 東原 輝明

東京都品川区北品川6丁目7番35号

ソニー株式会社内

(72) 発明者 新井 俊之

東京都品川区北品川6丁目7番35号

ソニー株式会社内

(74) 代理人 弁理士 山口 邦夫 (外1名)

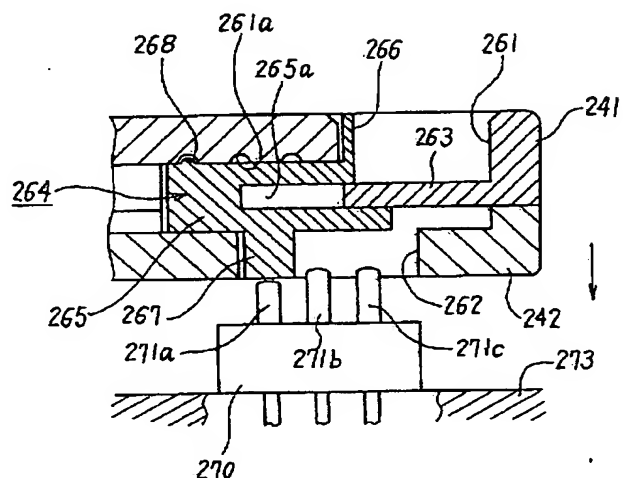
(54) 【発明の名称】 ディスク収納筐体

(57) 【要約】

【目的】 少なくとも3段階にわけて誤消去防止を図れるようにする。

【構成】 誤消去防止用突起 267 を第1段階（原位置）に位置させたときにはディスク上に設けられたメインデータエリアとサブデータエリアの双方が消去できるようになり、第2段階（突起 267 が摺動孔 262 の中間位置にある）に位置させたときにはメインデータエリアのみが誤消去防止され、サブデータエリア SA に記録されたデータのみ消去可能となる。誤消去防止手段 260 を第3段階（突起 267 が最右端にある）に位置させたときにはメインデータエリアとサブデータエリアの双方が誤消去防止され、プログラムエリアのデータの書き込みは全て禁止状態となる。3段階にわたり禁止モードを設定できるのでメインデータエリアのデータのみならずサブデータエリアデータをも確実に保護できる。

誤消去防止手段 260



BEST AVAILABLE COPY

## -【特許請求の範囲】

【請求項1】 書き込み可能なディスクを収納するケースの一部に、少なくとも3段階に切り換えられる誤消去防止手段が設けられたことを特徴とするディスク収納筐体。

【請求項2】 上記誤消去防止手段はスライド式に構成されたことを特徴とする請求項1記載のディスク収納筐体。

【請求項3】 上記誤消去防止手段を第1段階に位置させたときには上記ディスク上に設けられたメインデータエリアとサブデータエリアの双方が消去できるようになされたことを特徴とする請求項1記載のディスク収納筐体。

【請求項4】 上記誤消去防止手段を第2段階に位置させたときにはメインデータエリアのみが誤消去防止されることを特徴とする請求項1記載のディスク収納筐体。

【請求項5】 上記誤消去防止手段を第3段階に位置させたときにはメインデータエリアとサブデータエリアの双方が誤消去防止されることを特徴とする請求項1記載のディスク収納筐体。

【請求項6】 上記ディスクにはマスターディスク生成用の原音が記録され、データライト後のディスクはカッティングマスタテープとして使用されることを特徴とする請求項1記載のディスク収納筐体。

## 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【産業上の利用分野】この発明は、音楽ディスク製造工場で多数のコンパクトディスクCDやミニディスクMDなどを製造するときに使用される原盤であるカッティングマスタディスクを製造するマスタディスク装置などに適用して好適なディスク収納筐体、特にディスクの記録エリアに応じた誤消去防止を実現したディスク収納筐体に関する。

## 【0002】

【従来の技術】音楽ディスク製造工場で多数のコンパクトディスクCDやミニディスクMDなどを製造するときには、その原盤であるカッティングマスタ用の記録媒体を用意する必要がある。この記録媒体は通常磁気テープが使用される。図34はこの原盤を作成する場合に使用される従来のマスタレコーディング装置10の要部の系統図である。

【0003】図34において、11は大本の音楽信号が記録されているマルチチャンネルテープレコーダであって、通常はデジタルビデオテープレコーダ（Uマチックビデオテープレコーダ）が使用され、音楽信号が記録された原音テープが作成される。原音テープはマルチチャンネルで記録されたものであるから、これがマスタレコーダ12において2チャンネル信号に変換される。

【0004】マスタテープはさらに編集装置13に供給されてカッティングすべきディスクなどの種類に応じた

フォーマットに変換するための必要な編集処理が施されて、最終的なカッティング用のマスタテープが作成され、このマスタテープを使用して各ディスク製造工場では対応するディスク（CD、MDなど）さらにはカセットテープの生産が行われることになる。

## 【0005】

【発明が解決しようとする課題】ところで、近年の音楽用ディスクの普及に伴いその原盤にあっても記録媒体としてディスク原盤の要求が強くなってきた。原盤としてディスクを使用する場合にあつては、原信号を圧縮処理することなくリニアに原信号を記録できたり、原信号を破壊することなく1枚の原盤で編集できたり、原盤をディスクにすることのメリットは計り知れない。

【0006】テープに代えて原盤をディスクにする場合には、現在普及しているCDやMDと同じく防塵対策が採られた筐体に収納する構成が好ましい。一方、このディスクを編集用などとして使用する場合には音声データを記録するだけでなく、この音声データに関する編集データやディスク管理情報などをユーザが書き込んだ方が便利である。そうするには、ディスクのプログラムエリアを音声データを記録するエリア（メインデータエリアという）と、このメインデータエリアに付随した情報を記録するエリア（サブデータエリアという）とに分け、それぞれをユーザが管理できるようにした方が便利である。

【0007】データエリアを目的に応じて分離し、それぞれのエリアを記録できる領域として確保するのはユーザにとって好ましい反面、エリア内のデータを不用意に消去するおそれも多い。片方のエリアのみを消去すべきところ全てのエリアのデータを消去してしまうおそれもある。消去できるエリアとそうでないエリアをユーザが設定できた方がこのようなミスをなくすることができる。

【0008】そこで、この発明はこのようなディスク収納筐体とするときの課題を解決したものであって、誤消去防止できるステップを3段階に分け、必要なエリアはそのデータを確実に保護できるようにしたディスク収納筐体を提案するものである。

## 【0009】

【課題を解決するための手段】上述の課題を解決するため、この発明においては、書き込み可能なディスクを収納するケースの一部に、少なくとも3段階に切り換えられる誤消去防止手段が設けられたことを特徴とするものである。

## 【0010】

【作用】図8に示すように誤消去防止手段260はスライド式に構成され、第1段階（原位置）に位置させたときにはディスク300上に設けられたメインデータエリアMAとサブデータエリアSAの双方が消去できるようになり、第2段階（突起267が摺動孔262の中間位置にある）に位置させたときにはメインデータエリアM

Aのみが誤消去防止される。したがってサブデータエリアSAに記録されたデータのみ消去可能となる。

【0011】誤消去防止手段260を第3段階（突起267が最右端にある）に位置させたときにはメインデータエリアMAとサブデータエリアSAの双方が誤消去防止される。つまりこの場合にはプログラムエリアのデータの書き込みは禁止状態となる。

【0012】このように3段階にわたり誤消去防止態様を設定できるようにすることによってメインデータエリアMAのデータのみならずサブデータエリアSAデータをも確実に保護できる。

【0013】

【実施例】続いて、この発明に係るディスク記録再生装置の一例を上述したマスタレコーディング装置に適用した場合につき、図面を参照して詳細に説明する。

【0014】図1はマスタレコーディング装置10の概要を示す系統図であって、原音信号が入力する信号処理プロセッサ100と、目的に即した信号処理された音声データ（レックデータ）などは次段の記録再生処理系200に供給されて、ここに設けられたディスク300に記録される。

【0015】ディスク300は書き込み可能なディスクであって、これが原盤つまりカッティング用のマスタディスクとなる。ディスク300に記録された音声データはこれを破壊することなく編集することができる。その詳細は後述する。

【0016】400は信号処理プロセッサ100を制御するメインの制御部（メインCPU）であり、500は記録再生処理系200を制御するための制御部（CPU）である。CPU500は主としてディスク300に対するサーボ系の制御を司るものであるから、以下これをサーボCPUという。メインCPU400とサーボCPU500とは互いにSCSIインタフェースによって通信されて相互が同期して動作するようになされている。

【0017】図2はディスク300に対する音声データの記録再生系の概略を示すもので、ディスク300としては後述するような光磁気ディスク（MOディスク）を使用した場合であって、ディスク300を挟むようにして一方の面側にはレーザ光を使用した光ピックアップ装置310が、他方の面側には記録系を構成する磁気ヘッド装置230が配される。書き込み可能なディスクとしては光磁気ディスクに限られるものではない。

【0018】端子231にはデジタル化された音声データ（後述する音声データに付随するデータも含む）が供給され、これがヘッドドライバ232を経て磁気ヘッド233に供給されて、光ピックアップ装置310との共働で音声データの書き込み（ライト）が行われる。

【0019】磁気ヘッド装置230にはこれをディスク300に対して非接触状態で走査できるようにするため

ギャップセンサ234が設けられている。ギャップセンサ234はディスク300と対をなすような電極構成でディスク300との間の静電容量変化を検出してギャップLが一定となるように磁気ヘッド装置230が制御されるようになっている。

【0020】ディスク300は図3のような構成のものが使用される。ディスク基板（円板）301の下面の所定位置には図4にその詳細を示すように絶対アドレスをFM変調することによってウオープリングされたブリググループ（案内溝）303が所定の領域にわたって形成され、このブリググループ303の面を覆うようにこのブリググループ303よりも僅かに大きな面積で光磁気膜（MO膜）304がコーティングされる。302はチャッキング用の孔である。

【0021】光磁気膜304は周知のように特定のポインントが所定温度以上に加熱されるとここに加えられる外部磁界の方向に光磁気膜304が磁化されるもので、所定温度以上の加熱はレーザ光を照射することによって実現できるから、音声データの書き込み時は読み出し時よりもレーザパワーが強くなるように制御される。光磁気膜304の表面は保護膜305によって覆われている。

【0022】ブリググループ303にプリストライブされた絶対アドレス（AAIP）について図5を参照して説明する。ブリググループ303には絶対アドレスがFM変調されて記録されているが、絶対アドレスは同図Bのようにブロック単位で記録される。絶対アドレスはプリマスタードされたアドレスである。1つのブロックには同図Cに示すように同一アドレスデータが5回繰り返されて記録されている音声データは同図Dのように5絶対アドレス1ブロックを同じく1ブロックとして定義されており、この1ブロックに105フレームのデータが収められる。105フレームのうち98フレームが音声データ用のフレームであり、ブロック前部に5フレーム分のプリアンプ領域が確保され、ブロック後部に2フレーム分のポストアンプ領域が確保されている。

【0023】メインデータエリアMAに付される絶対アドレスはその内周側から外周側に向かって大きくなり、サブデータエリアSAに付される絶対アドレスはその外周側から内周側に向かって大きくなるように記録されている。

【0024】音声データの読み出しを行う光ピックアップ装置310は図6のように構成される。光ピックアップ装置310はその大部分はCDなどの光ピックアップ系において実用化されている光ピックアップ装置を流用することができる。

【0025】レーザ光源601からコリメータレンズ602を介して得られたレーザ光（レーザビーム）がグレーティング603で回折されて複数のレーザ光に分割される。この例では信号取り出し用の他にトラッキングエラー検出用およびフォーカス制御用に使用するため少な

くとも3ビームに分割される。分割されたレーザ光はビームスプリッタ604および位相ミラー605さらには対物レンズ606を介してディスク300上に照射される。

【0026】ディスク300より反射されたレーザ光(戻り光)はビームスプリッタ604に入射され、ビームスプリッタ604内を透過したレーザ光は1/2波長板607を介しさらに集光レンズ608及びマルチレンズ609を介してビームスプリッタ610に入射する。ビームスプリッタ610で反射されたレーザ光は第1の光検出素子611に結像され、ビームスプリッタ610を透過したレーザ光は第2の光検出素子612に結像される。

【0027】第1および第2の光検出素子611、612は必要に応じて光検出面が複数に分割された複数の検出素子で構成することができ、それぞれから得られた出力を加減算処理して音声データ(RF信号)の検出やトラッキングエラーの検出およびフォーカスエラーの検出が行われる。

【0028】ビームスプリッタ604の端面に設けられたフォトディテクタ613はレーザ光源601のパワーを自動制御するためのいわゆるAPC用の光量検出手段である。

【0029】書き込み可能なディスク300はCDやMDと同じく扁平ケース(筐体)に収納された状態で使用される。図7はその一例を示すディスク収納筐体240の斜視図である。

【0030】収納筐体240は図のように上下一対の扁平な上ケース241と下ケース242とで構成され、両者が合体された状態での上下両面の所定位置には所定の大きさの窓孔243、244が形成され、常時はシャッタ245が閉じられて内部に収納されたディスク300が塵埃などから保護されている。音声データの記録再生時には図のようにシャッタ245が開く。シャッタ245は筐体前面に形成された凹部246に付設された解除突起によってそのロックが解除される。ロックの解除は筐体を装置本体(図示はしない)にローディングされたとき行われるが、この機能は従来の機構を流用しているのでその説明は省略する。

【0031】筐体の側部前面に形成された溝247、248はローディング中の案内溝である。筐体の前面側部に設けられた凹部249は筐体の誤挿入防止手段である。これはコンピュータのデータセーブ用として多用されている5.25インチサイズのMOディスクとの区別を容易にするためのものである。誤挿入防止の観点からさらに図では既存のMOディスクより一回り大きめのサイズに設定されている。

【0032】上ケース241の一面はラベルエリア250となされる。251は下ケース242に形成された筐体の位置決め用の穴(リファレンス穴)であり、252

は同じく下ケース242に形成されたディスクタイプの検知穴である。ディスクタイプは例えばカッティングマスタの種別に対応させることもできれば、再生専用、1回限り書き込みできる追記形かあるいは書き込み可能かなど種別に対応させることもできる。

【0033】筐体の側部後面にはそれぞれ所定幅の凹部253、254が設けられ、これを係合凹部としてローディングされた筐体を別の場所に搬送するときに用いられる。

10 【0034】筐体の後面側部には誤消去防止手段260が設けられる。上述したディスク300のプログラマブルエリアにはメインデータエリアMAとサブデータエリアSAとがあり、それぞれのエリアに対してデータを記録できるので、どのエリアに対しても誤消去を防止できるように工夫する必要がある。

【0035】誤消去防止手段260は3段階に切り替えられる。第1の段階はメインデータエリアMAとサブデータエリアSAとの双方のエリアに対してデータを自由に書き換えできるモードである。

20 【0036】第2の段階はメインデータエリアMAの誤消去防止を図るモードである。したがってこの第2段階はサブデータエリアSAについては書き換えが自由である。第3の段階はメインデータエリアMAの他にサブデータエリアSAに対しても誤消去防止を図るモードである。

30 【0037】このように3段階に分けて誤消去防止を図ることによってプログラマブルエリアのデータをユーザの目的に併せて確実に保護することができる。このような段階的な誤消去防止を達成するために図8以下のような構成が施される。

【0038】誤消去防止手段260にあって、図8のように上ケース241には所定幅の摺動孔261(図9参照)が穿設され、下ケース242にも所定幅で上ケース241よりは若干内側に位置して摺動孔262が穿設される。上ケース241からは図のようなガイド板263が内部に突出するように設けられ、このガイド板263に沿って誤消去防止爪264が摺動できるようになされている。

40 【0039】誤消去防止爪264はガイド板263に即したスライド凹部265aを持つ本体265を有し、その上部端部には上方に突出するように位置決め片266が設けられ、また、本体265の下部端部には下方に突出するように検出突起267が設けられている。この例では位置決め片266に対し、検出突起267は所定長さだけケースの内側に位置するように選ばれている。268は本体265の摺動位置を3ポジションに固定するための位置固定用の突起であり、上ケース241の対応する位置には対応する凹部261aが設けられている。

50 【0040】装置本体側には摺動孔262に対峙するように本体基板273に検出センサ270が取り付け固定

されている。検出センサ270には以下説明するように3つの検出子271a~271cが設けられ、その当接状況によって誤消去防止爪264の摺動位置が検知できるようにになっている。

【0041】図8の切り換え状態では位置決め片266は図9のような位置にあり、そのときの検出突起267は図10の位置となる。この切り換え状態を第1の切り換え段階とする。図9において、位置決め片266を右側に1ステップ移動させた切り換え状態が第2の切り換え段階となり、さらに右側に1ステップ移動させると第3の切り換え段階となる。

【0042】図8に示す検出センサ270の検出出力はサーボCPU500に供給されて検出出力に応じた記録禁止信号が生成され、これで磁気ヘッド装置230と光ピックアップ装置310が各切り換え段階に応じた誤消去防止モードとなるように制御される。

【0043】光磁気膜304の領域がデータ記録領域(プログラムエリア)となるものであるが、このプログラムエリアにあってその外周側から内周に向かう所定の領域はメインデータエリアMAとして確保され、メインデータエリアMAからさらに内周側の所定の領域がサブデータエリアSAとして確保される。

【0044】メインデータエリアMAには音声データそのものが記録され、サブデータエリアSAには記録される音声データに付随したデータが記録される他、ディスク管理情報などが記録される。図11にサブデータエリアに記録されるデータの代表的なものを示す。これらのデータのうちディスク識別コード(ディスクID)はそのディスク固有の識別コードである。波形データについては後述する。

【0045】図12は信号処理プロセッサ100の具体例を示す。端子101にはアナログ音声信号が供給され、これがA/D変換器102においてデジタル信号に変換される。端子103からはデジタル音声信号が供給されこれがデジタルインタフェース回路104に供給される。デジタル化された音声信号はスイッチ105において何れかの入力を選択された後フェードコントロール回路(クロスフェード)110に供給される。

【0046】フェードコントロール回路110は音声信号のフェードイン、フェードアウトなどのクロスフェードを実現するための処理系であって、デジタルシグナルプロセッサ(DSP)111とクロスフェード処理のためのテンポラリRAM112と、さらにクロスフェード処理情報を一時的に格納するサブデータ用のRAM113とで構成される。

【0047】クロスフェード処理されたデジタル音声信号はエンコーダ106を経てその出力端子107に出力される。デジタル音声信号は音声データとして磁気ヘッド装置230に供給される。

【0048】光ピックアップ装置310より読み出され

た音声データは記録再生処理系200を経て入力端子120に供給される。この音声データはデコーダ121でデコード処理され、エラー訂正処理がテンポラリRAM122を使用して行われる。これらの処理が済んだ音声データはフェードコントロール回路110に供給されるが、プログラム再生時はプログラム再生用のフェードコントロール回路130に供給される。

【0049】フェードコントロール回路130は入力切り替えスイッチ131と一対のバッファメモリ132、133とDSP134とで構成される。切り替えスイッチ131はデコーダ121の出力と、端子124より入力してSCSI通信インタフェース125に供給された他の装置からの音声データの選択処理が行われる。

【0050】フェードコントロール回路130では例えば図13Aに示すディスク300上でのランダムな音声データa, b, cを同図Bあるいは同図Cのようにプログラムした状態でクロスフェード処理できるようにするためのものである。このとき、同図Dのように音声データの間に適当なポーズ期間を挿入することもできる。ポーズ期間は一定か、あるいはユーザがコントロールできるようにしてもよい。

【0051】プログラム再生されたクロスフェード処理後の音声データは切り替えスイッチ135を経てフェードコントロール回路110に入力する。プログラム再生された音声データである場合にはフェードコントロール回路110は単にスルー状態となるようにコントロールされる。

【0052】その出力はD/A変換器136にてアナログ信号に変換されて端子137に導かれるか若しくは直接デジタルインタフェース回路138を経てデジタル信号のまま端子139に導かれる。

【0053】端子140は必要に応じて供給されるタイムコードTCの入力端子で、タイムコードTCが入力したときはインタフェース回路141と切り替えスイッチ142を経てエンコーダ106に導かれ、音声データと共にメインデータエリアMAに記録される。デコーダ121より出力されたタイムコードTCは切り替えスイッチ142およびインタフェース回路144を経て外部端子145側に出力される。

【0054】メインCPU400は上述したクロスフェード処理など信号処理プロセッサ100において必要な各種の信号処理の際の制御を司るもので、さらに波形データ処理回路151などもこれによって制御される。波形データ処理回路151はウェーブフォーム編集機能を有し、音声データを所定間隔でサンプリングして波形データが蓄積される。RAM152はそのときに使用するテンポラリRAMである。

【0055】図14はこの波形データ編集例を示すもので、同図A, Bのように元の音声データに対して所定期間T内での最大値を求め、これを記録開始から記録が終

了するまで蓄積されて波形データとしてサブデータエリアSAに記録される。

【0056】この波形データを連続的に観測することによってどのような音声データが記録されているのかを大まかに把握できる。これは表示部153上に表示することができる。詳細は後述する。

【0057】表示部153の一部には図15に示すようなレベル表示部が設けられている。このレベル表示部は2チャンネル分表示できるようになされ、それぞれは複数個本例では24個の表示エレメント181が直線状に配列されて構成される。182はレベルオーバを表示するための表示エレメントである。

【0058】表示エレメント181を24個使用したのはこのレベル表示部180を入力音声データの最大量子化ビット数でも表示できるようにするためである。これは標本化するとき使用するサンプリング周波数が3種類(48KHz, 44.1KHzおよび44.056KHz)用意されているため、使用するサンプリング周波数によって量子化ビット数が24ビット、20ビット、16ビットと相違するからである。

【0059】表示エレメント181とビットとの対応関係は例えば図15のように左端部の表示エレメントがMSBを表すものとし、右側に行くにしたがってロービットが表示される。16個目の表示エレメントが量子化ビット数が16ビットであるときのLSBとなり、以下同様に20個目が20ビットのときのLSBとなり、そして24個目が24ビットのときのLSBを表示することになる。

【0060】図16はこのようなビット表示を達成するための表示エレメント駆動回路185の具体例を示す。

【0061】端子186に入力した音声データ(デジタルオーディオデータ)は8段構成のシフトレジスタ187に供給され、端子190からのシフトクロック(ビットクロック)によって1ビットずつ順次シフトされる。シフトレジスタは3個使用され、それぞれは縦続接続され、シフトレジスタ187の最初の入力ビットがLSBで、最終入力ビットがMSBとなる。各シフトレジスタ187, 188, 189のビット出力はそれぞれラッチ回路191, 192, 193で同時にラッチされ、そしてドライバ194, 195, 196を経て対応する表示エレメント181に供給される。このように構成すると、図15に示すような入力ビット数に対応したビット表示を実現できる。

【0062】再び図12に戻って信号処理プロセッサ100を説明する。メインCPU400に関連して設けられたアラーム手段154は後述するディスクチェック時に塵埃などの付着によってデータエラーが発生したようなときユーザに警告するためのものである。詳細は後述する。

【0063】155は信号処理を遂行するために必要な

制御プログラムなどが格納されたROMであり、フェードコントロール回路110に設けられたテンポラリーRAM113などに一時的に格納されたサブデータ情報などは最終的にRAM156にストアされる。

【0064】170はユーザが操作するキーボード、インタフェース回路171はサーボCPU500との通信(SCSIなど)を行うときに使用されるインタフェースである。

【0065】図17は記録再生処理系200の具体例を示す。エンコード106より出力された音声データ(レックデータ)はFIFO構成のバッファメモリ202に供給され所定ブロック数の音声データがストアされると、このライト速度よりも速い速度でリードされる。リード速度はライト速度を基準にしてこれを1倍速とすると少なくともほぼ2.5倍以上の速度に設定される。実施例は2.5倍速とする。3倍速も適切な値である。ディスク300に対してこのように高速でアクセスするのは、後述するように単一のピックアップ系を使用してレックモニタを実現するためである。

【0066】2.5倍速でリードされた音声データはヘッドドライバ232を経て磁気ヘッド装置230に供給されて記録される。203は磁気ヘッド装置230のギャップ長を一定に制御するためのギャップサーボ回路である。

【0067】ディスク300に記録された音声データは光ピックアップ装置310によって読み出される(再生される)。このときの読み出し速度は書き込み速度と同じ2.5倍速である。再生出力はイコライザ回路211で再生出力波形の整形が行われ、再生出力中に含まれる絶対アドレスはPLL回路212に供給されて再生クロックが生成される。

【0068】この再生クロックを基準にして波形整形された再生出力データがFIFO形式のバッファメモリ213に供給されてストアされる。バッファメモリ213からのデータ読み出し速度は1倍速であり、読み出されたデータはデコード121に供給される。

【0069】信号処理プロセッサ100より出力された音声データに対してその転送速度の2.5倍で音声データをディスク300に書き込み、同じ速度で読み出し、信号処理プロセッサ100に与えるときは元の1倍速に戻すような信号処理をしたのは、上述したように1本のレーザ光でレックモニタなどを実現するためである。

【0070】図18を用いてこのレックモニタを説明する。ディスク300での音声データの書き込み速度が2.5倍であるときは音声データ3ブロック分がバッファメモリ202にストアされた段階でリードモードがスタートする。そうすると、オリジナルの音声データの時間軸とバッファメモリ202よりリードされた音声データの時間軸との関係は図18A, Bのようになり、オリジナル音声データの1ブロック分強で3ブロック分の音

声データのディスク300への書き込みが終了する。

【0071】書き込みが終了すると、光ピックアップ装置310は直前に書き込まれた音声データの先頭アドレスまで高速アクセス（高速シーク）され、その後直ちに読み出しモードに移行する。読み出し速度も書き込み速度と同じく2.5倍速であるから書き込み時間と同じ時間で3ブロック分の音声データの読み出しが終了する（同図C）。

【0072】したがって音声データの書き込み時間と読み出し時間を合わせてもオリジナルの3ブロック分の時間よりも短いから、同図Bのように音声データの読み出しが終了した段階で直ちに直前に書き込まれた音声データの後端データのところまで光ピックアップ装置310がアクセスされて、次の音声データ（4～6ブロック）の書き込み処理に備えることができる。

【0073】一方、読み出された音声データはバッファメモリ213においてその時間軸が元の時間軸に戻された状態でリードされるから、図18Dのように次の音声データの書き込み処理と同時に直前に書き込まれた音声データのモニタを行うことができる。

【0074】図19はこれを概念的に説明したもので、ディスク300への音声データの書き込み処理と読み出し処理がペアとなって、これが繰り返されることにより音声データの書き込み動作とレックモニタ動作が同時進行で行われることになる。

【0075】再び図17に戻って記録再生処理系200を説明する。光ピックアップ装置310からは信号成分のみならずトラッキング信号やフォーカス信号がそれぞれ検出され、これらがフォーカスおよびトラッキングエラー検出回路215に供給されてトラッキングエラーおよびフォーカスエラーがそれぞれ独立に検出され、それらのエラー信号がゼロになるように光ピックアップ装置310に設けられたトラッキング制御回路とフォーカス調整回路（共に図示はしない）にフィードバックされる。

【0076】トラッキング信号はさらに絶対アドレスの検出回路216にも供給される。絶対アドレスはウオブリックされているので戻りレーザ光の明るさがこの絶対アドレスで変調されている。この変調出力から絶対アドレスが検出される。絶対アドレスはディスク300の回転速度の信号でもあるからこれに基づいてスピンドルモータ218のサーボ回路217が制御されてディスク回転速度（例えば線速度CLV）が一定となるように制御される。

【0077】絶対アドレスはサーボCPU500を経てメインCPU400に供給されてSMPTEなどのタイムコードTCに変換される。絶対アドレスはさらにアドレスチェック回路221にも供給され、後述するディスクエラーチェックの判断データとして使用される。

【0078】ディスクエラーチェックは、ディスク使用

中に塵埃などがその表面に付着しデータ書き込みにエラーが発生したり、データを正しく読み出せないようなトラブルを未然に防止するために行うものである。ディスクエラーチェックのためにはトラッキングエラーも検出する必要がある。220はこのトラッキングエラー検出回路であって、その出力はサーボCPU500に与えられる。ディスクエラーチェックの詳細は後述する。

【0079】700はクロック発生回路として使用される可変発振回路である。クロックは記録系のバッファメモリ202やスピンドルサーボ回路217にその基準信号として供給される。音声データの量子化ビット数によって使用されるクロック周波数が違うため、さらには可変速再生を行いながら音声データの編集を行う必要があるから、可変発生回路7000は図20のように構成される。

【0080】基準発振器701はその発振源として発振出力が安定な水晶振動子などが使用される。基準発振出力は分周器702で $1/n$ （ $n$ は整数）に分周され、分周出力が位相比較器703に供給される。704は電圧制御形などを使用した可変発振器（VCO）を示し、その出力がクロックとして使用されると共に、可変分周器705に供給されサーボCPU500によって指定された分周比の通りに分周される。

【0081】分周出力は位相比較器703で基準の分周出力と位相比較され、その出力がローパスフィルタ706を経てVCO704に供給されてサーボCPU500で設定されたクロック周波数で発振するようにPLL制御される。発振出力はスイッチ707を経て出力される。

【0082】スイッチ707には基準発振器241の発振出力も供給され、VCO704が基準の発振出力（ $f_0' = f_0$ ）となるように制御されているときには基準発振器701の発振出力に切り換えて使用するようになっている。

【0083】VCO704はLC回路などで構成されているためある程度のジッタが発生する。このジッタは再生音質の劣化につながる。基準発振器701は安定性の高い水晶振動子などを使用するためVCO704に比べジッタが遥かに少ない。したがって基準の発振周波数に制御されているときは基準発振器701の発振出力を利用した方がより高品質の再生音質となるから、このような場合を考慮してスイッチ707が設けられている。基準の発振出力を選択するか否かはサーボCPU500側で管理しているので、これよりスイッチコントロール信号を与えればよい。

【0084】図21はシンクレックの説明図である。シンクレックは同期再生、同期書き込み（同期記録）のことであり、既に記録されている音声データの一部を別の音声データに書き換えたいようなとき、あるいは記録されている音声データの一部にノイズが混入したときでこ



れをとりたいようなときには別のデータ（ゼロを示す音声データ）に置換したいようなときにこのシンクレックモードが選択される。

【0085】図21Bのようにディスク300からは2.5倍速で音声データが読み出され、これがバッファメモリ213の作用で同図Aのように元の時間軸（1倍速）に戻されてモニタされる。2度目の音声データの読み出しが終了した段階では先にモニタした結果どの位置にある音声データを置換させるべきかをオペレータは把握しているので、2度目の音声データの読み出しが終了したら直ちに光ピックアップ装置310を最初の音声データの先頭アドレスに戻すアクセス動作を行う。その後同図Cのように1度目の音声データを読み出して必要な個所に対する再書き込み動作を行えば、必要な個所の音声データを置換できる。

【0086】ディスク300への音声データの書き込みと読み出しは同一のクロックを使用して行われるので同期再生、同期書き込みを伴うシンクレック動作を単一の光ピックアップ装置310だけで行うことができる。

【0087】図22はディスク識別コード（ディスクID）の登録例を示すフローチャートである。

【0088】ディスクIDは数字や記号あるいはこれらを組み合わせて使用されるそのディスク固有の識別コードであって、ディスクを管理する上で是非とも必要なものである。ディスクIDは装置本体にインサートしたときに装置本体内部において乱数表などを使用して発生させた例えば特定桁の数値を当てればよいが、ユーザの管理をよりよくするためには、数字コードの設定はユーザの管理に委ねた方がよい場合もある。

【0089】図22はその双方を実現するための一例を示すフローチャートであって、ディスク300を装置本体に装着すると（ステップ361）、ディスクIDの登録の有無がチェックされる（ステップ362）。

【0090】ディスクIDはサブデータエリアSAに記録されているから、このエリア内のデータを検索することによってディスクIDの登録の有無をチェックできる。サブデータエリアSAのデータは一旦全てリードされてRAM156にストアされている。

【0091】ディスクIDが登録されていないときは登録コード指定のチェックが行なわれ（ステップ363）、自動設定（自動発生）であるときは乱数表にしたがった固有のディスクIDが指定され、これが表示部153上に表示される（ステップ364）。

【0092】外部入力による指定であるときにはキーボード170上から特定桁の数字が入力され、その数値は同様に表示部153上に表示される（ステップ365）。自動設定若しくは登録指定されたディスクIDはユーザの操作に基づいてサブデータエリアSAに登録（記録）される（ステップ366）。自動設定や登録指定は何れもキー操作によって行なわれる。

【0093】ディスク300上に既にディスクIDが登録されているときは、そのデータのリード処理が行なわれ（ステップ362、370）、次のステップは登録されているディスクIDを変更するか否かのチェックモードとなる（ステップ371）。変更しないときにはそのままこの登録処理が終了し、変更する旨のキー操作がなされたときには、ステップ363以降と同じ処理が実行されたのち（ステップ372、373、374、375）、登録処理が終了する。

【0094】ディスクIDのディスク300への書き込みタイミングは上述のようにユーザのキー操作によって行なわれる場合のほか、ディスクイジェクト時に自動書き込み処理を行なうようにもすることができる。こうする場合にはディスクIDの書き込みを忘れ、事後のディスク管理に支障をきたすようなおそれなくなるからである。

【0095】図23はサブデータエリアSAに記録すべきメインデータに付随した各種の情報（以後単に編集データ等という）に対するプロテクトモードを採用したときの処理例である。

【0096】ディスク300上に音声データを記録し、それに対して切り出し点のアドレスを指定したり、クロスフェード処理を指定するための各種編集データ等は、編集作業終了後、装置本体のRAM156からディスク300のサブデータエリアSAに書き込まれて登録される。

【0097】以後はこの編集データ等に基づいて音声データの読み出しが行なわれる。編集データ等をサブデータエリアSAに記録する場合、装置本体に読み込まれたディスクIDと、記録すべきディスク300のディスクIDが相違するときには誤記録を防止する上で、これをオペレータに知らせた方がよい。

【0098】図23はこれを実現するための一例を示すもので、編集データ等を記録するための実行キーが押されたときには（ステップ381）、RAM156上のディスクIDとディスク300に記録されているディスクIDとの照合が行なわれ（ステップ382）、一致している場合で誤消去防止爪266が第3段階の位置にセットされていないければ（ステップ383）、そのまま編集データを記録する実行処理が行なわれる（ステップ384）。

【0099】これに対し、誤消去防止爪264が第3の段階にセットされているときはサブデータエリアSAに対するプロテクトモードであるため、このときはディスクIDが一致していても書き換えが禁止されると共に、ユーザにはアラームによる警告がなされる（ステップ385）。このとき、表示部153上には書き換え禁止モードであることを表示してもよい。

【0100】ディスクIDが一致していないときも（ステップ382）、同じようにディスクID不一致の表示



と共にアラームによる警告が行なわれる（ステップ386）。

【0101】これらの処理が終了したのちイジェクトキー操作の有無がチェックされ（ステップ387）、操作されたときにはディスク300が排出される（ステップ388）。操作されなくても他のキーが押されたときは同様にディスク300が排出されて（ステップ389）、編集データ等のプロテクト記録処理が終了する。

【0102】図23の実施例は編集動作継続中の任意のタイミングに実行キーを押したときの編集データ等に対するプロテクトモードの具体例である。

【0103】図24は実行キーの操作の有無に拘わらず特にイジェクトモード時の編集データ等に対するプロテクトモードの具体例であるが、図23と相違するステップはステップ389に対応するものが存在しないだけである。これは、図24はもともとイジェクトキーが操作されたときだけ起動される制御プログラムだからである。そのため、図23と対応するステップには対応する符号（391～398）を付し、その説明は割愛する。

【0104】図24のプロテクト処理により編集データ等がこの編集データ等とは無関係なディスクに記録されることもなければ、編集データ等を不用意に消失することもない。

【0105】図25は絶対アドレスからタイムコードに変換するための処理例である。編集時には絶対アドレスより時、分、秒、フレームという単位のタイムコードで管理した方が便利でもあるし、間違いも少なく、外部機器に送出する場合も便利である。

【0106】ディスク300には上述したように絶対アドレスがFM変調されてプリグループ303に記録されている。この絶対アドレスはアドレス検出回路216で検出され、これがサーボCPU500を介してメインCPU400に伝達される。メインCPU400ではこの絶対アドレスから図25のフローチャートにしたがって指定された形式のタイムコードに変換する。

【0107】そのため、図25のようにまずブロックアドレスである絶対アドレスが検出され（ステップ411）、次にワード長BLKWD及びタイムコードフォーマットデータTCWDなどの変換処理のための定数がセットされる（ステップ412）。ワード長やタイムコード用フォーマット情報は何れもサブデータエリアSAに書き込まれているので、電源を切ったあとでもその情報はディスク300に残存するため、後の再現性には影響を及ぼさない。

【0108】ワード長BLKWDは図26に示す通り、量子化ビット数に依存する値である。タイムコード用フォーマットデータTCWDは図27のように変換すべきタイムコードとサンプリング周波数によって決まる値であって、タイムコードのフォーマットとして本例では図のように4種類（SMPTE（2種類）、EBU、FI

LM）が示されている。

【0109】計算定数をセットしたら、次式にしたがって総フレーム数TCFRMが算出される（ステップ413）。

【0110】

$TCFRM = (BLKADR \times BLKWD) / TCWD$

ここに、BLKADR：現在の絶対アドレス

BLKWD：1ブロック当りのワード数

TCWD：1タイムコードフレーム当りのワード数

次に、絶対アドレスのスタートオフセット値TCOFFS Tが加算されて最終的な総フレーム数TCACTが算出される（ステップ414）。

【0111】この総フレーム数TCACTが時、分、秒、フレームのタイムコードに変換され、変換出力が表示されたり、外部に出力される（ステップ415、416、417）。

【0112】図28はディスクエラー処理フローの一例である。ディスク表面に塵埃などが付着することによってデータがライトできなかったり、リードできないときディスクエラーは発生する。

【0113】図28において、ディスク300が装置本体に挿入されるとこのエラーチェックプログラムが起動する。まずスピンドルモータをオンにしてフォーカス及びトラッキング動作をオンにし、そして光ピックアップ装置310をディスク最内周（メインデータエリアMAの先頭）にシークさせておく（ステップ421～423）。

【0114】この状態でデータのリードが行なわれてエラーの検出が行なわれる（ステップ424）。まず図17に示したトラッキングエラー検出回路220においてトラッキングコントロールによってもトラッキングエラーが解消されないときはトラッキングエラーが異常と判断され（ステップ425）、そのときのエラーアドレスが登録される（ステップ426）。

【0115】次のステップとして絶対アドレスの読み込みが行なわれ、これよりCRCエラーのチェックが行なわれる（ステップ428）。CRCとはエラー訂正符号のことであり、CRCエラーがあるとエンコーダ106においてエラー訂正処理を正しく行なうことができなく再生音質が劣化するからである。

【0116】CRCエラーがあると、アドレスカウンタ（エラーカウンタ）を内挿（動作）させてエラーカウンタのカウント値がインクリメントされ（ステップ429、430）、カウント値（エラーカウンタ値）が規定値（本例では「4」）以上のとき、その絶対アドレス（エラーアドレス）が登録される（ステップ431、432）。

【0117】CRCエラーがないときにはエラーカウンタがクリアされて次に絶対アドレスの連続性がチェックされる（ステップ433、434）。連続性に異常があ

るときは上述と同じくそのときのエラーアドレスが登録され(ステップ432)、その後正常な場合と同じくディスク最終点まで同じようなチェック処理が行なわれる(ステップ435)。

【0118】最外周までのエラーチェックが終了すると、エラーの有無を判別し、エラーがなかったときはエラーチェック終了を表示し、エラーがあったときはディスク300の清掃を行なうと同時に、アラームを駆動したり、エラーアドレスが表示されてこのエラーチェック処理が終了する(ステップ436~438)。

【0119】図29は波形データを記録する場合に用いられる処理フローである。

【0120】この例では音声データの記録開始と同時に波形データを記録するためのサンプリングが開始され(ステップ441)、所定周期T(図14参照)内での音声データの最大値maxが検出される(ステップ442, 443)。検出された最大値に対応する音声データの記録アドレスが検知され、その記録アドレスに対応したRAM152に音声データの最大値がストアされる(ステップ444, 445)。

【0121】この最大値検出と、検出された最大値のストア処理が音声データの記録が終了するまで実行され(ステップ446)、記録が終了すると同時にサブデータエリアSAのうち記録アドレスに対応した所定の位置にストアされて波形データ記録処理が終了する(ステップ447)。

【0122】この波形データ記録処理にあつて、所定周期 $t$ としては例えば0.1秒程度に設定すれば音声データを十分に圧縮できるから、波形データを連続再生することによって音声データの大まかな波形エンベロープを知ることができる。これは編集時の波形把握に活用できるから非常に便利である。

【0123】図30はディスクの記録可能エリアを有効に利用するためのデータ記録最適化処理の一例を示す。

【0124】音声データの編集時、ディスクに記録された音声データの全てを用いて編集するとは限らず、通常は多少多めに音声データを記録しておき、そこから必要なテイク(TAKE)を切り出して使用する。そのため、編集後の音声データ量に対して最初に記録された音声データ量の方が遥かに多い。

【0125】音声データが記録できるメインデータエリアMAの領域を有効に活用するためには、編集によって不要になった音声データの領域はこれを空き領域にして新しい音声データを記録できるようにすべきである。

【0126】このような処理を以後最適化処理と呼称する。最適化処理にあつては最適化する前のデータ記録領域を、最適化後のデータ記録領域としても使用する関係上、最適化後のデータ記録に際しては最適化する前のデータ記録領域にまだ編集作業に使用していない音声データが存在しているか否かを予めチェックしておく必要が

ある。そうしないと、これからの最適化処理に使用されるはずの未使用音声データの記録領域に最適化後の音声データが重ね書きされてしまうおそれがあるからである。

【0127】図30および図31を参照して説明すると、図30において $S_i$ ( $i$ は1, 2, ..., 以下同様)は最適化処理する前の音声データで、斜線で示されるデータ領域 $N_i$ が編集時に使用される切り出し用の音声データ(素材データ)で、 $I_i$ が切り出し開始点、 $O_i$ が切り出し終了点である。素材データ $N_i$ は $i$ の小さい順から編集されるものとする。

【0128】 $E_i$ は編集データポイント(編集点)を示し、編集点 $E_i$ と素材データ $N_i$ の開始点および終了点の関係は図31のようになる。図30において、 $W$ は記録点のポイントでこれは最適化処理するときの編集点 $E$ におけるデータ書き込みポイントを表す。これに対して、 $R$ は最適化するまえの素材データ $N_i$ に対する読み出しポイントを示している。

【0129】最適化後の素材データ $N_i$ は $i$ が小さい順から順次最適化する前の音声データ $S_i$ 上に重ね書きされるから、今最適化する素材データ $N_1$ の編集点 $E_1$ の始点が最適化する前の点 $q$ であるときには、音声データ $S_1$ 上にこの素材データ $N_1$ を読み出しながら重ね書きしてもこの素材データ $N_1$ を破壊することなく重ね書きすることができる。

【0130】編集点 $E_2$ についても同じである。しかし、素材データ $N_3$ を記録するときには音声データ $N_1$ 上の素材データ $N_4$ (まだ最適化処理には使用されていない素材データである)に対して重ね書きしなければならない。この場合には素材データ $N_4$ を一旦退避させておき、その後素材データ $N_3$ を素材データ $N_4$ 上に重ね書きすればよい。素材データ $N_3$ を重ね書きしたあとで退避した素材データ $N_4$ が音声データ $S_1$ 上に重ね書きされる。

【0131】以後退避すべきは退避処理した上で最適化処理が最後の編集点まで実行されることになる。最適化処理が終了すると図30のようにデータの空きエリアが増えるので、ディスク300をさらに有効に利用できる。

【0132】退避処理などを考慮して図32および図33に示すような最適化処理が実行される。図33は図32に続く処理ステップである。

【0133】図32および図33に示す処理フローにおいて、サブデータエリアSAの記録データは全てRAM113若しくは156(本例では156を使用)に一旦ストアされるから、このRAM156上のデータを検索しながら空きエリアと編集データの読み出しが行われてこれが再びRAM156にストアされる(ステップ452, 453)。その後、記録点ポイント $W$ 、編集データポイント $E$ の初期化が実行される(ステップ454, 4

55)。

【0134】以後の説明は、図30と図31の具体例を参照してそれぞれの処理ステップを説明することにする。

【0135】初期化が終了すると、編集データE(E1)の内容が退避されているかがチェックされる(ステップ456)。編集データE1はまだ退避されていないのでステップ457に移って、素材データNの読み出しポインタRが編集データEによって初期化される(ステップ457)。このとき編集データE1の先頭アドレスに読み出しポインタRがくるように初期化される。

【0136】次に、編集データE1が退避されていないときは記録点ポインタWから所定長の音声データが以後の編集データとして使用されるかがチェックされる(ステップ460)。編集データE1に対応した最適化前の素材データは存在しないのでこの場合には読み出しポインタRからの音声データが記録点ポインタWから所定長だけ書き込まれる(ステップ461)。

【0137】所定長の音声データとは例えばテンポラリーRAM113などの容量によって決まるデータ長で、これは1つのまとまった編集データ(単一のテイク若しくは複数のテイクで構成される)である場合があるいはこれより短い場合の双方が考えられる。

【0138】次に、読み出しポインタRの音声データはまだ存在するかがチェックされ(ステップ463)、まだ音声データが存在するときは1編集データE1の終了とはならないため、RとWをそれぞれ更新して次の所定長のポインタまでシフトして、同様な書き込み処理が行われる(ステップ465、466)。

【0139】読み出しポインタRのデータが存在しなくなるまで音声データの重ね書きが行われると(ステップ463)、読み出しポインタRのデータエリアが空きエリアとして登録される(ステップ464)。つまり音声データS1のうち素材データN1のエリアが空きエリアとなる。空きエリアとなるとここに新たな音声データを記録できる。

【0140】1編集データであるE1の重ね書きが終了すると、編集点Eの更新が行われる(ステップ467、468)。次の編集点はE2となる(図31参照)。この最適化後に重ね書きされる編集点E2の最終位置は最適化前の編集開始点I4には重ならないので、編集データE1と同じステップを通して素材データN2が最適化前の音声データS1のエリアに重ね書きされる。そして、編集点Eが更新されてE3となる。

【0141】編集点E3となっても退避された内容は存在しないが(ステップ456)、この新たな編集点E3にあって記録点ポインタWから所定長の音声データ(素材データN4に相当する)は、図30より明らかなように編集データとして使用されるがまだ実際の編集には使用されていないデータである。この場合にはステップ4

62に移って記録点ポインタWからの素材データN4がディスク300の空きエリアに退避される。これと同時に退避情報がRAM156に登録される。

【0142】そして、ステップ457で設定された編集点E3に対応する素材データN3が記録点ポインタW(これは編集点E3の先頭アドレス)から重ね書きされる。編集点E3に関する素材データN3に関して最適化前の素材データN4の位置に重ね書きが終わると編集点Eが再び更新されてE4となる。

10 【0143】そうすると、ステップ456で編集データE4が退避されていることが判るので今度はステップ458に移り、素材データN4に関する読み出しポインタRは上述した退避情報を用いて初期化、つまり編集点E4の先頭アドレスに変更される。その後退避された素材データN4は記録点ポインタRから重ね書きされる(ステップ461)。

【0144】このとき、図30において素材データN2の一部に最適化するための素材データN4の一部が重なるが、この素材データN2のデータエリアは既に空きエリアとして登録されているので(ステップ464)、素材データN4に関する重ね書き処理には支障をきたさない。

【0145】以上のような最適化処理が音声データの退避処理を伴いながら順次最終の編集データまで行われ(ステップ467)、全編集データが終了することによってこの最適化処理フローが終了する。

【0146】

【発明の効果】以上説明したように、この発明ではメインデータエリアとサブデータエリアに分けて誤消去を防止できるように少なくとも3段階にわたり誤消去防止態様を選択できるように構成したものである。

【0147】これによれば、メインデータエリアのみならずサブデータエリアに記録されたデータをも確実に保護することができる。したがって、編集データはそのままにしてメインデータエリアのデータのみを書き換えたりすることができるようになり、目的にあったデータ保護を実現できる。

【0148】そのため、この発明はカッティング用マスターレコーディング装置などに使用されるディスク収納筐体に適用して極めて好適である。

【図面の簡単な説明】

【図1】マスターレコーディング装置の要部を示す系統図である。

【図2】ピックアップ系とヘッド系の概要を示す図である。

【図3】ディスクの断面図である。

【図4】その一部の断面図である。

【図5】絶対アドレスとデータとの関係を示す図である。

50 【図6】光ピックアップ装置の具体例を示す要部の斜視

図である。

【図7】データ収納筐体の一例を示す斜視図である。

【図8】誤消去防止手段の要部断面図である。

【図9】誤消去防止手段の一例を示す平面図である。

【図10】その裏面図である。

【図11】サブデータエリアの記録内容の一例を示す図である。

【図12】ディスクレコーディング装置において使用される信号処理プロセッサの一例を示す系統図である。

【図13】プログラム再生モードの説明図である。

【図14】波形データの記録例を示す説明図である。

【図15】データビット表示例を示す説明図である。

【図16】データビット表示を実現するための表示エレメント駆動回路の一例を示す系統図である。

【図17】ディスクレコーディング装置において使用される記録再生処理部の一例を示す系統図である。

【図18】レックモニタの説明図である。

【図19】ディスク上でのレックモニタ動作を説明する図である。

【図20】クロック発生回路として使用できる可変発振回路のブロック図である。

【図21】シンクレックの説明図である。

【図22】ディスクIDを登録するための一例を示すフローチャートである。

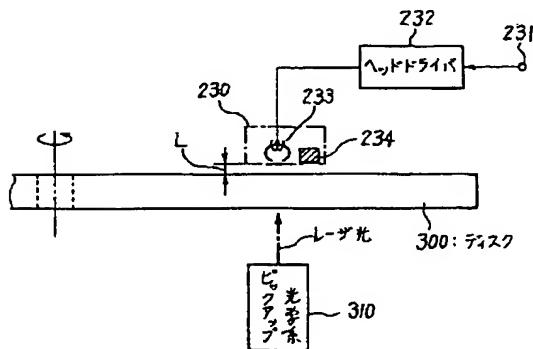
【図23】編集データ等の記録例を示すフローチャートである。

【図24】同じく編集データ等の記録例を示すフローチャートである。

【図25】タイムコード変換例を示すフローチャートである。

【図26】タイムコード変換の説明図である。

【図2】



【図27】同じくタイムコード変換の説明図である。

【図28】ディスクチェックを行うための一例を示すフローチャートである。

【図29】波形データを記録するためのフローチャートである。

【図30】記録データの最適化処理の説明図である。

【図31】最適化処理のときに使用される編集データの説明図である。

【図32】記録データの最適化処理の一例を示すフローチャートである。

【図33】記録データの最適化処理の一例を示すフローチャートである。

【図34】従来のマスタレコーディング装置のブロック図である。

【符号の説明】

300 ディスク

310 光ピックアップ装置

230 磁気ヘッド装置

100 信号処理プロセッサ

200 記録再生処理系

400 メインCPU

500 サーボCPU

260 誤消去防止手段

264 爪

266 位置決め片

267 突起

110, 130 フェードコントロール回路

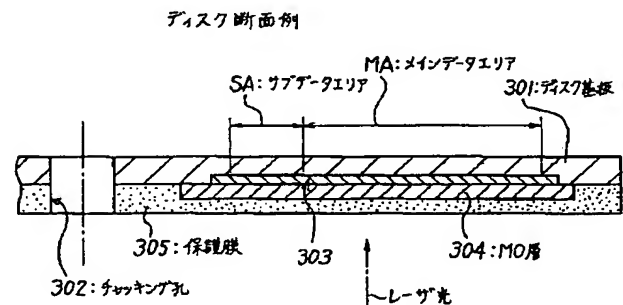
153 表示部

154 アラーム手段

30 181 表示エレメント

700 可変発振回路

【図3】



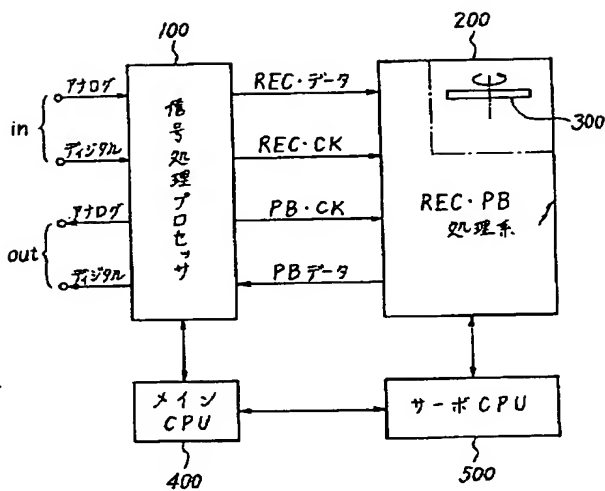
【図26】

B L K W D

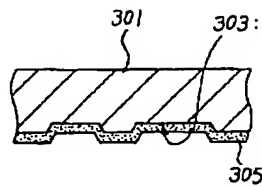
16Bit	20Bit	24Bit
1470	1176	980

【図1】

マスタレコーディング装置 10

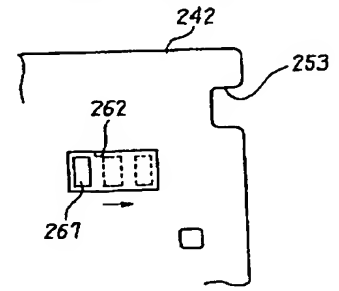


【図4】



【図10】

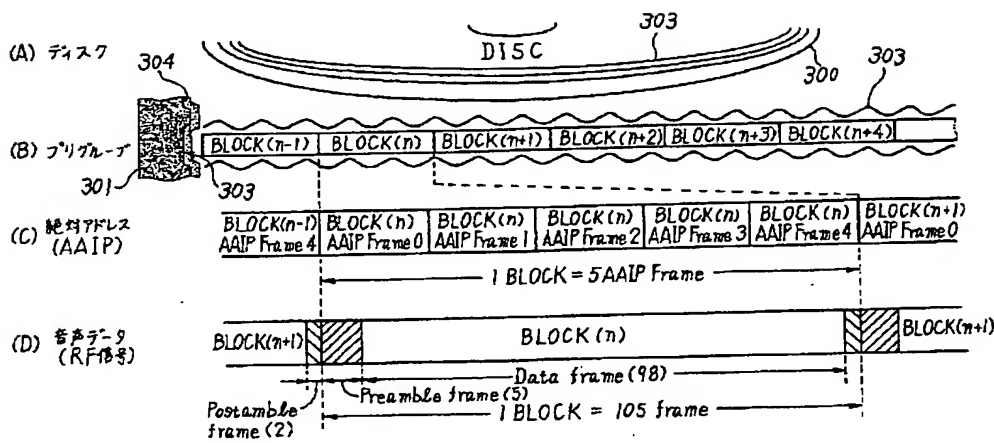
誤消去防止手段 260 (裏面)



【図15】

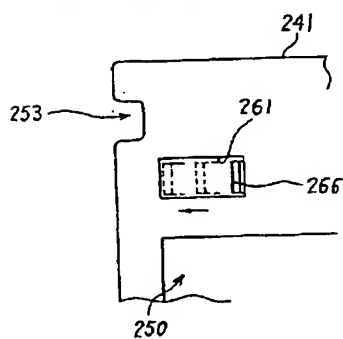
ビット表示例

【図5】



【図9】

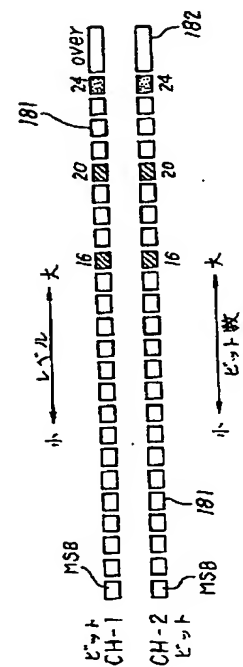
誤消去防止手段 260 (平面)



【図27】

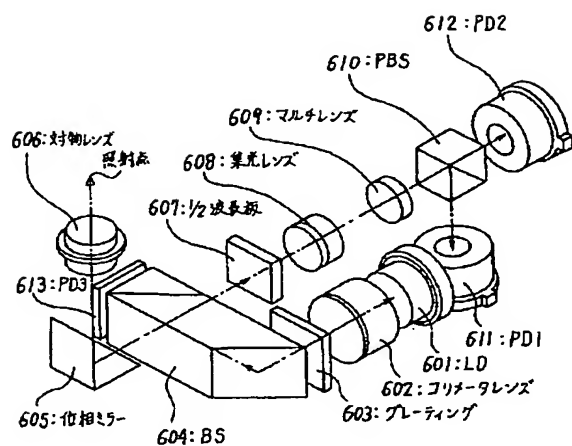
TCWD

Sampling Freq.	TC Format			
	SMPTE 30 Hz	SMPTE 29.97 Hz	EBU 25 Hz	FILM 24 Hz
48 KHz	1800	1801.8	1820	2000
44.1 KHz	1470	1471.47	1764	1837.5
44.056 KHz	1468.531	1470	1762.238	1835.664



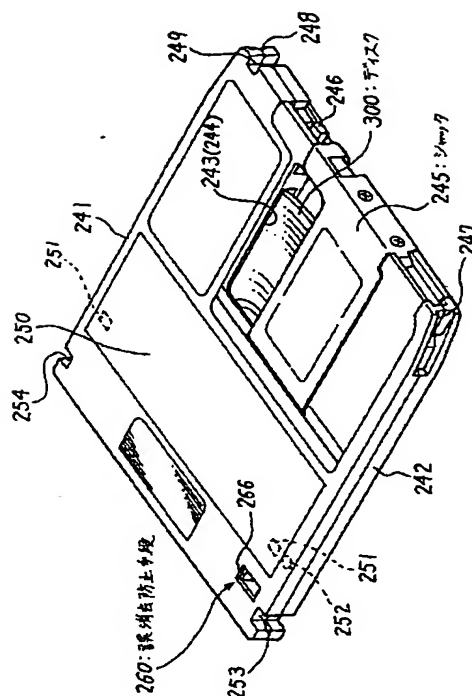
【図 6】

光ピックアップ装置 310



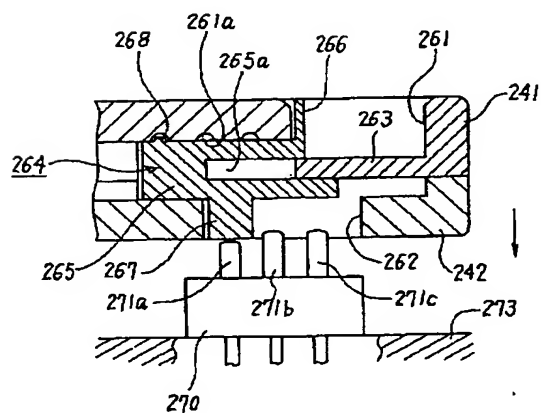
【図 7】

ディスク収納筐体 240

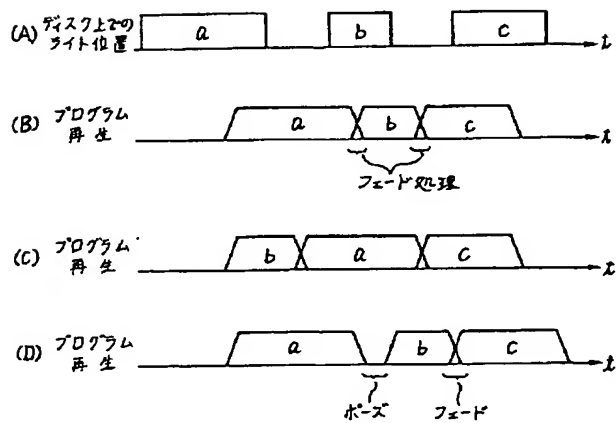


【图 8】

## 誤消去防止手段 260

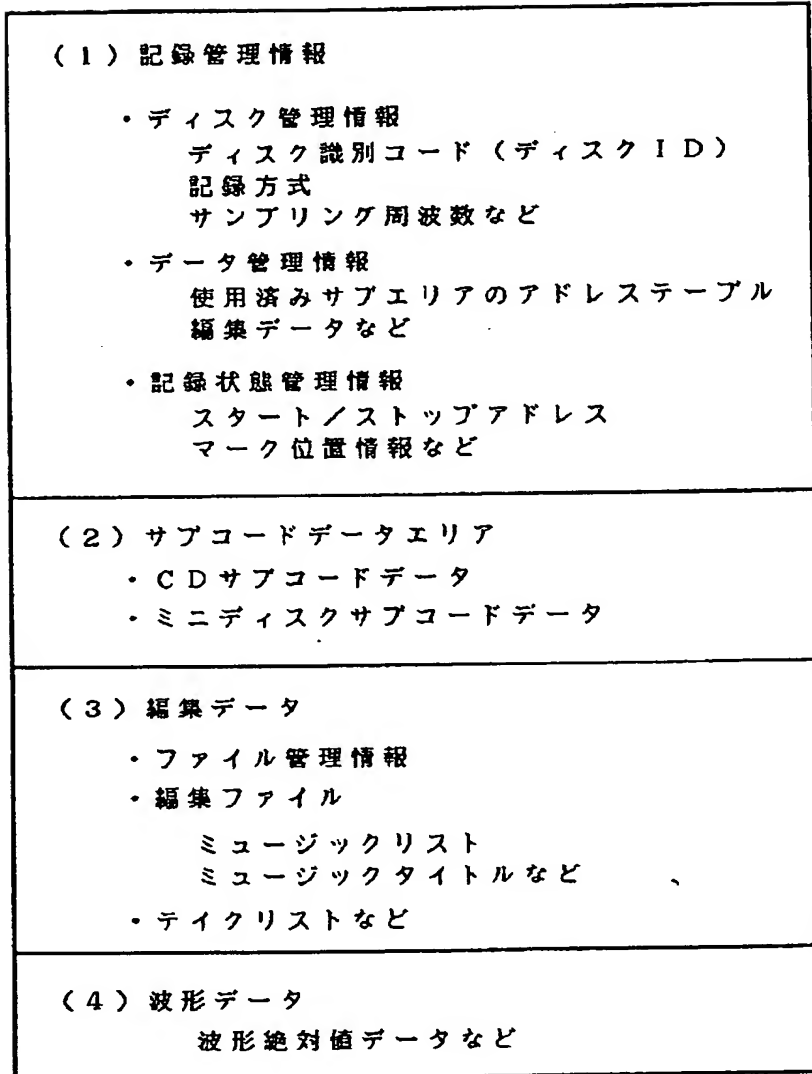


【図 13】



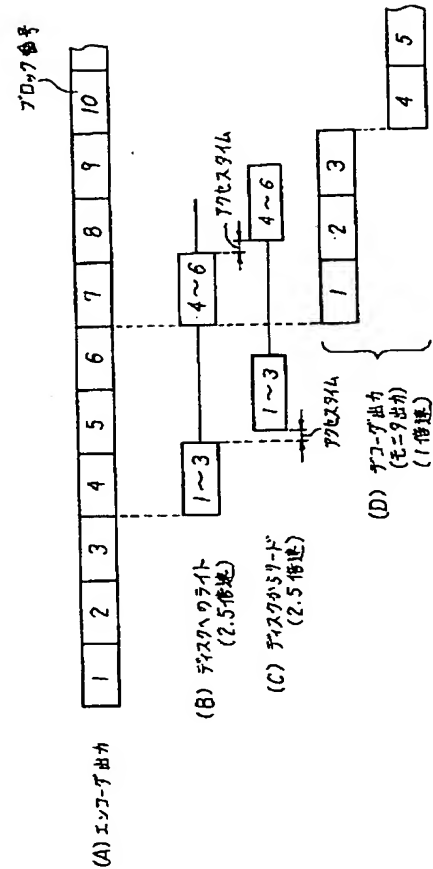
【図11】

## サブデータエリアの記録内容例



【図18】

## レックモニアの説明



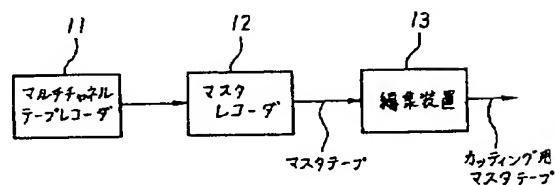
【図31】

## 編集データ

編集点	開始点	終了点
E 1	11	01
E 2	12	02
E 3	13	03
E 4	14	04
E 5	15	05
E 6	16	06
.	.	.
.	.	.
.	.	.

【図34】

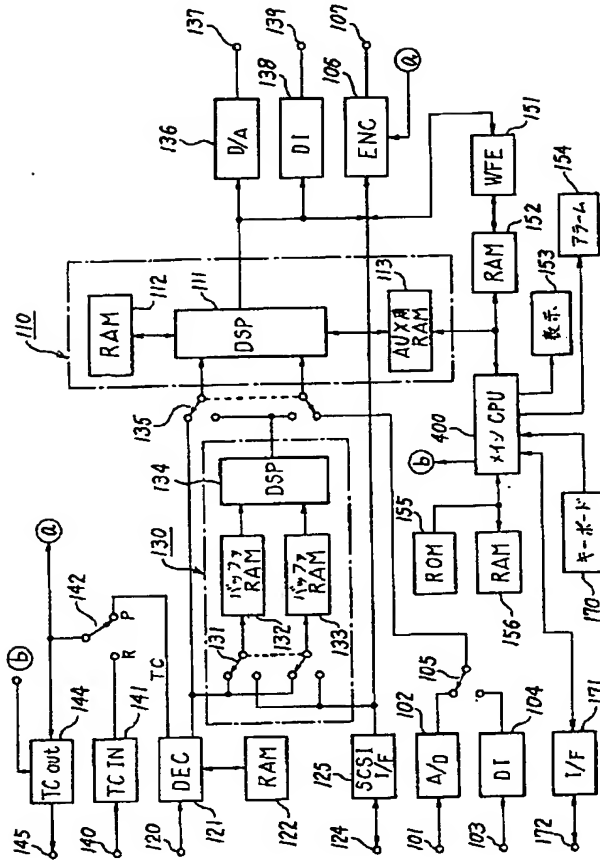
## 10





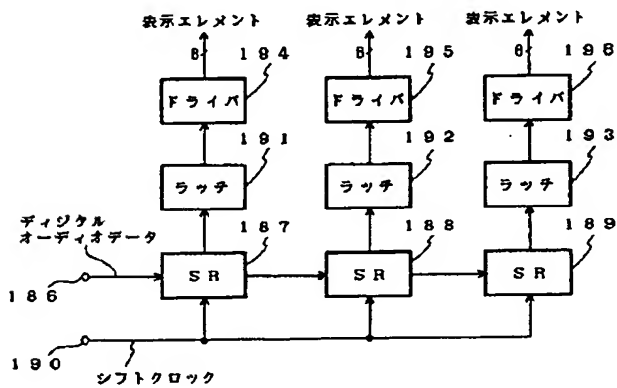
【図12】

信号処理プロセッサ 100



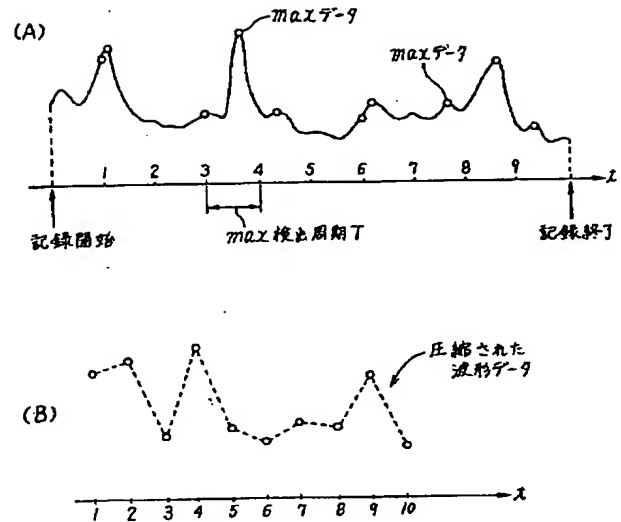
【図16】

表示エレメント駆動回路 185

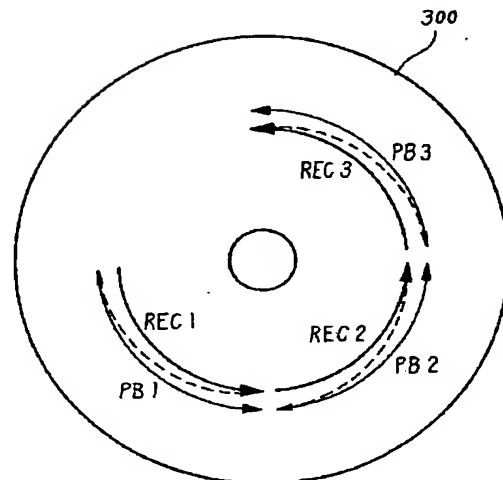


【図14】

元の音声データ



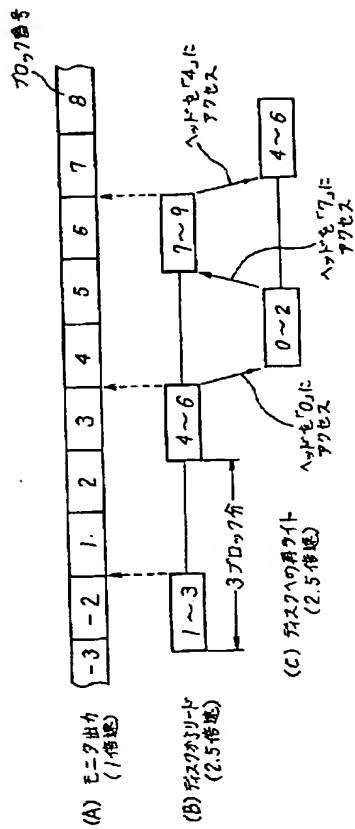
【図19】





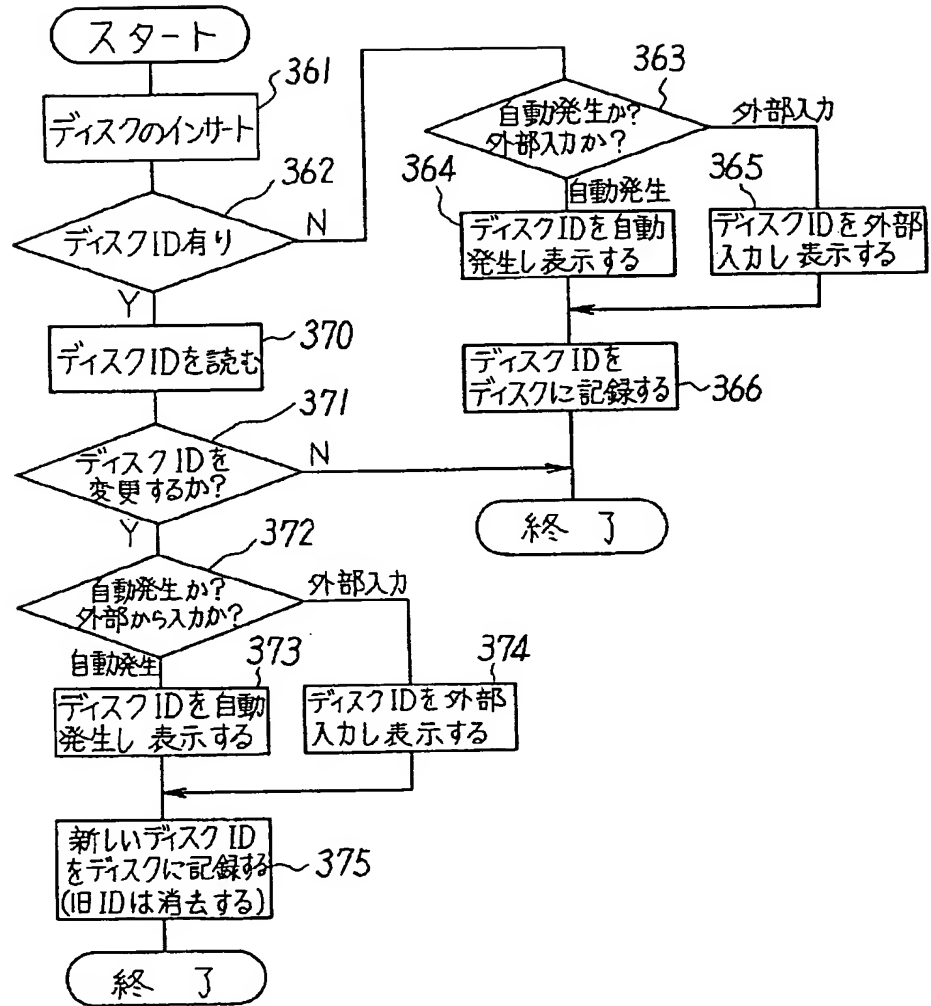
【図21】

シンクレックの説明



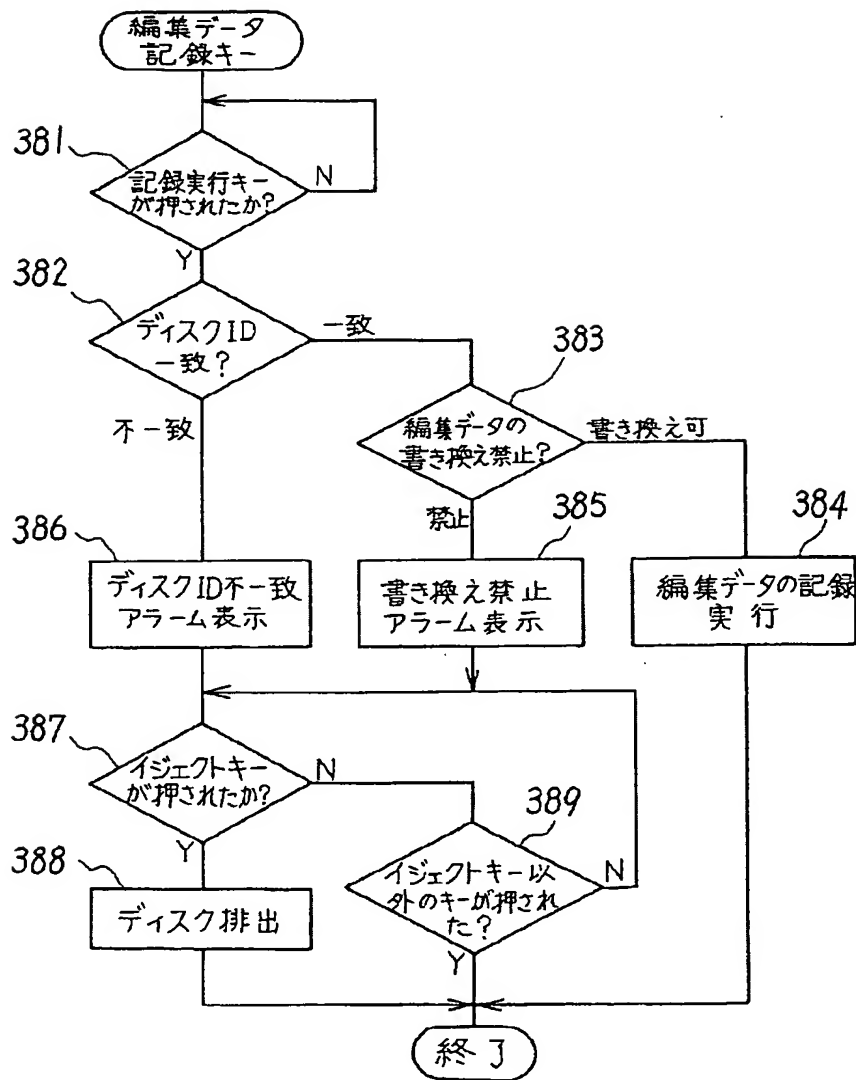
【図22】

ディスクIDのフロー



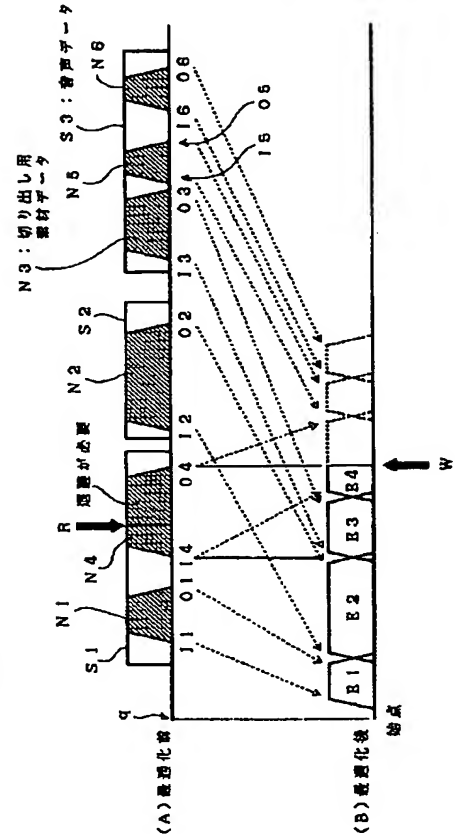
【図23】

## 編集データの記録



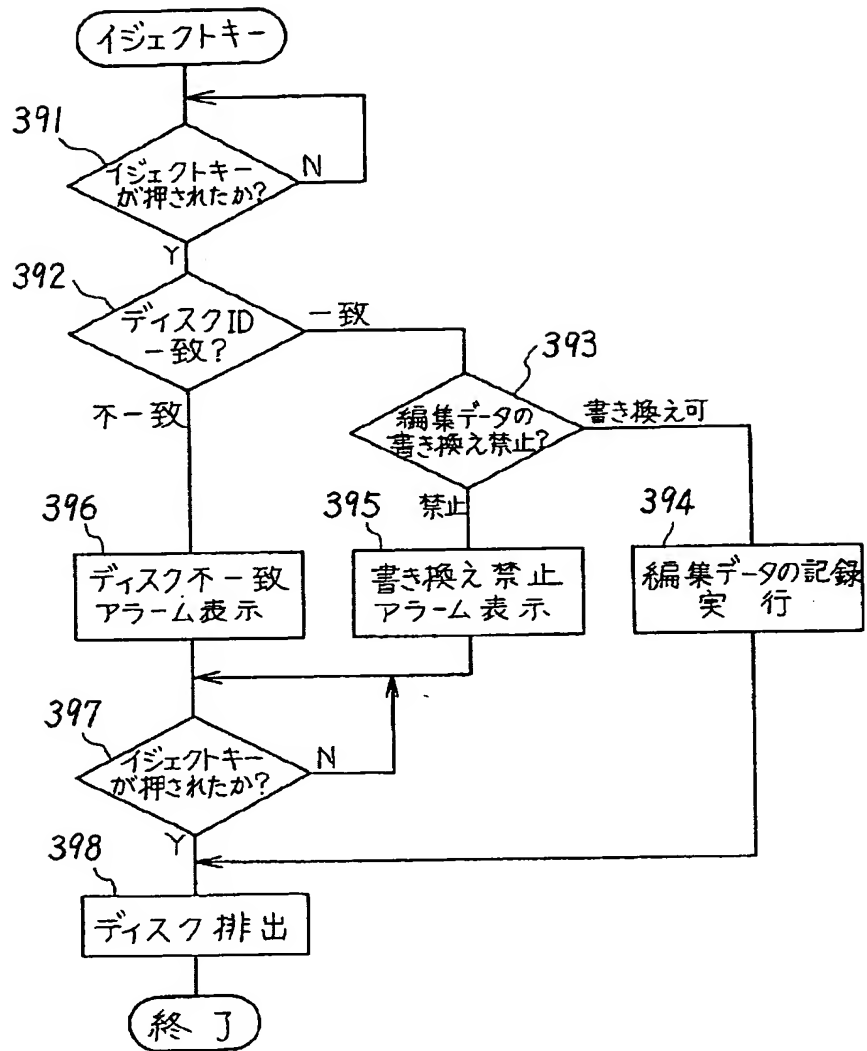
【図30】

最適化処理の説明



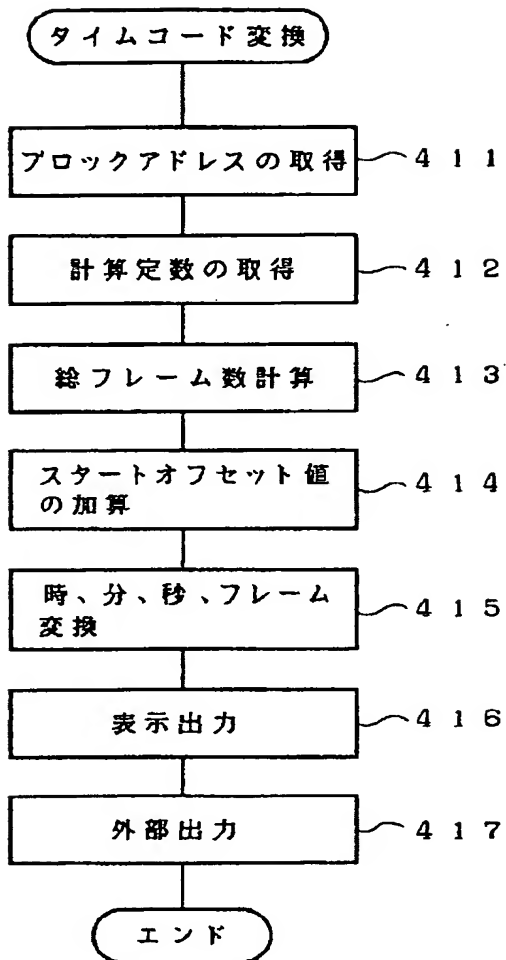
【図24】

## 編集データの記録



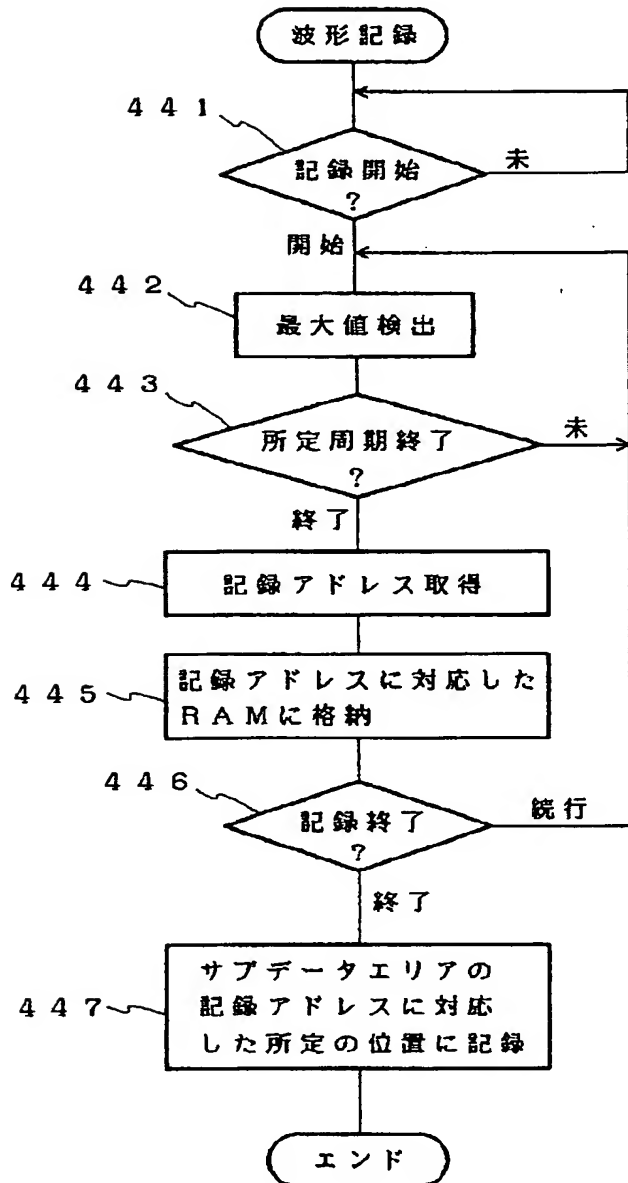
【図25】

## タイムコード交換フロー



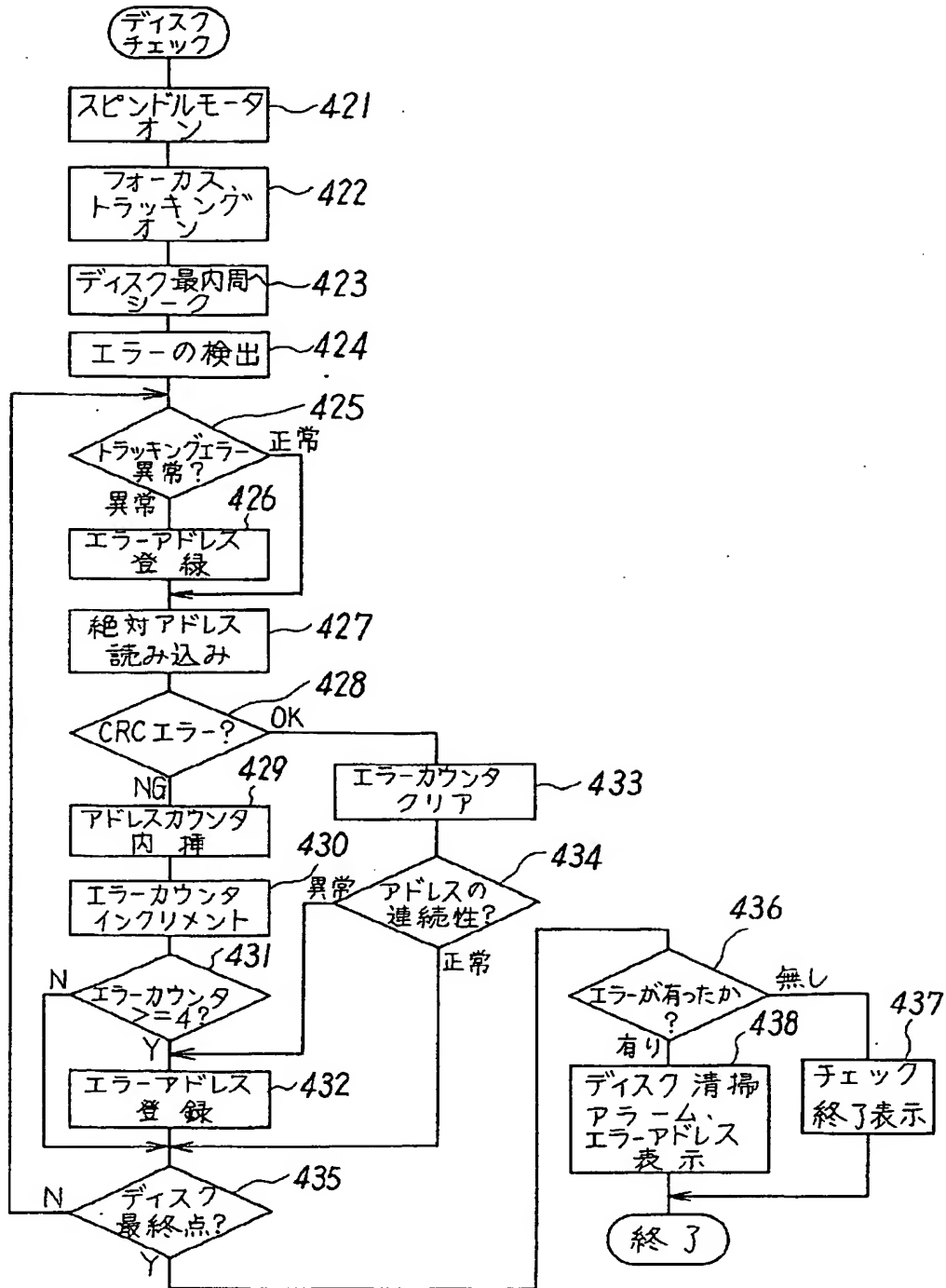
【図29】

## 波形記録フロー



【図28】

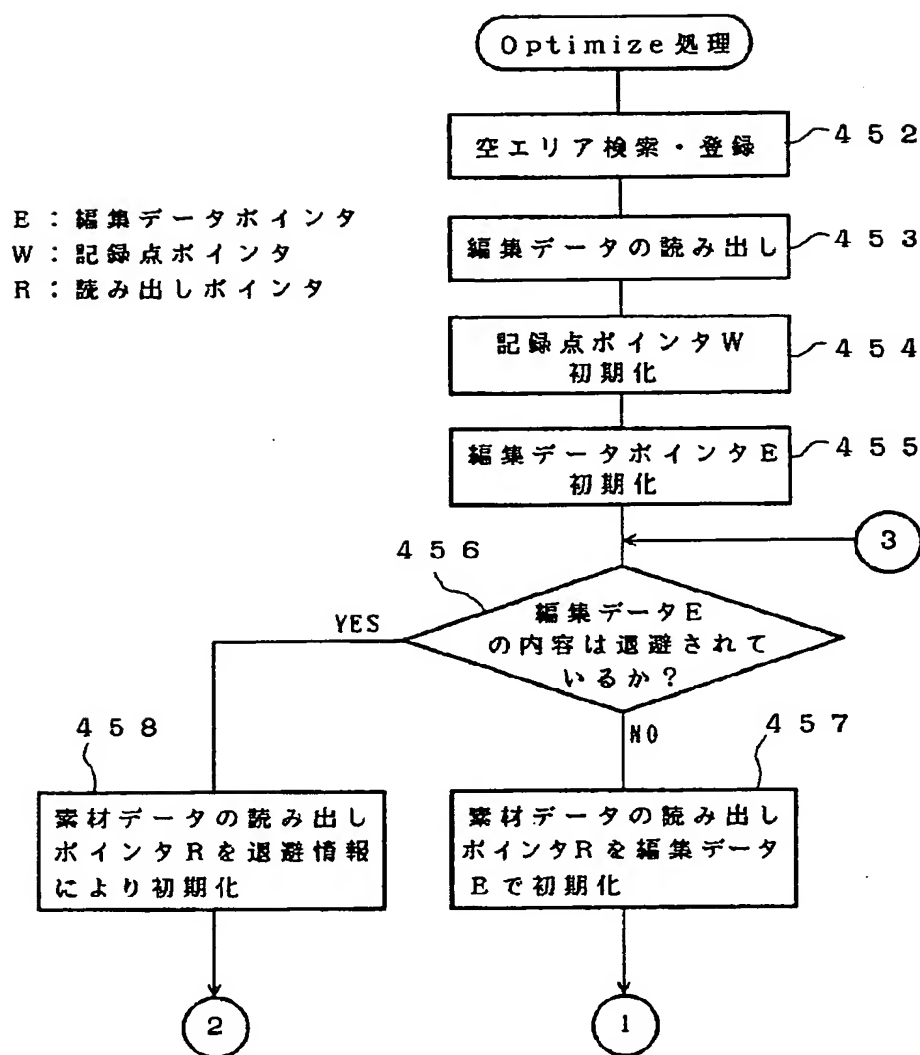
## ディスク チェック フロー





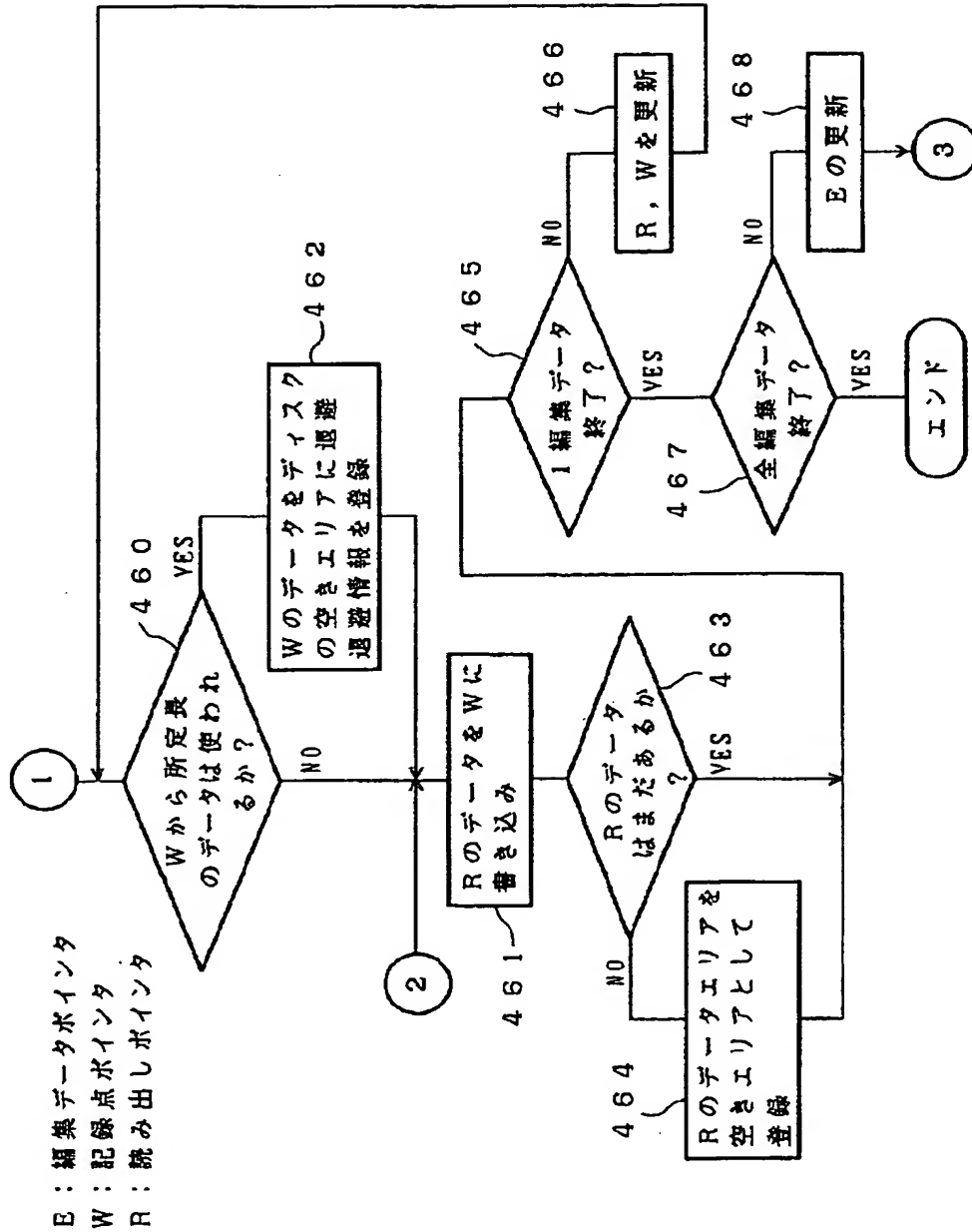
【図32】

## 最適化処理フロー（その1）



【図33】

## 最適化処理フロー（その2）



**This Page is Inserted by IFW Indexing and Scanning  
Operations and is not part of the Official Record**

**BEST AVAILABLE IMAGES**

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images include but are not limited to the items checked:

- ☐ BLACK BORDERS
- ☐ IMAGE CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES
- ☒ FADED TEXT OR DRAWING
- ☒ BLURRED OR ILLEGIBLE TEXT OR DRAWING
- ☐ SKEWED/SLANTED IMAGES
- ☐ COLOR OR BLACK AND WHITE PHOTOGRAPHS
- ☐ GRAY SCALE DOCUMENTS
- ☒ LINES OR MARKS ON ORIGINAL DOCUMENT
- ☐ REFERENCE(S) OR EXHIBIT(S) SUBMITTED ARE POOR QUALITY
- ☐ OTHER: \_\_\_\_\_

**IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.**

**As rescanning these documents will not correct the image problems checked, please do not report these problems to the IFW Image Problem Mailbox.**